

令和6年3月18日 不採択

能登半島地震からも原発の危険は鮮明であり、伊方3号機の運転停止と廃炉を求める請願について

(趣旨)

1月1日に発生した能登半島地震は原発の危険性を鮮明にし、福島第一原発事故と重ねて、原発との共存はできないことを示しました。

同半島西の中ほどにある志賀原発は、1号機、2号機ともに停止状態でしたが、冷却電源は不可欠。外部電源3系統のうち2系統の変圧器などに破壊が及び、最大の500キロボルト系統は途絶しました。また、原発への津波も3メートルの高さに及んでいました。国の地震調査研究推進本部(推本)は、マグニチュード7.6、震源の深さ16キロメートルの地殻内地震とし、「北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型」と公表しました。最大震度は7で、死者は圧死者をはじめ241人(2024年2月7日時点)に上ります。

原発事故を想定した能登の避難道路は寸断され、「屋内退避」のできない現実もあらわになりました。「放射線防護施設」は全ての施設が断水し、気密性を保てない箇所も相次ぎました。震源が原発から65キロメートルほど離れていたこと、顕著な地盤隆起が原発の北10キロメートル辺りまでであったことなど、まさに「偶然」によって最悪の結果を回避できたと言わねばなりません。重大事故に至っていたら、避難ができず被曝が広がる、桁違いに深刻な事態が懸念されました。

伊方原発の北6キロメートルには中央構造線活断層帯があり、直下には南海トラフの震源域があり、二重の脅威にさらされています。原発前面の中央構造線を活断層と発見した岡村真さん(高知大学名誉教授)は「右横ずれ断層を主成分としながらも逆断層成分を含む」と指摘。「逆断層」の危険性を伊方でも無視できません。

伊方3号機から松山市西垣生町まで50キロメートル。原発で過酷事故が起こった場合、飯舘村北部(福島原発から46キロメートル)とあまり変わらない距離です。しかも海上を一直線です。遮るものがありません。50万住民を被曝させずどこに避難させ得るのか。とてつもない話です。実際には、一刻も早く原発を止めて廃炉にするほか、解決策はないのではありませんか。

については、以下の点を請願します。

## 記

(請願事項)

- 1 能登半島地震は原発の危険を鮮明にしており、伊方原発の運転停止と廃炉を国及び四国電力に求めること。
- 2 松山市が原発事故による汚染地域・被災地域になる可能性のあることを議会として認識し、市当局に危機感を共有できるよう働きかけること。